

ほんとうの幸福とは何か

—『絶望の国の幸福な若者たち』の批判的再検討から—

柴 田 賢 哉

目次

はじめに

1. 高度経済成長から現代におけるライフコースの相違
 1. 1 高度成長期（昭和型）の生き方
 1. 2 現代人のライフコース
2. 『絶望の国の幸福な若者たち』が問いかけるもの
 2. 1 現代版若者の幸福論
 2. 2 幸福な若者の正体
3. ほんとうの幸福とは何かその条件
 3. 1 未来が不安だから今が不安になる
 3. 2 生と死は切り離せない問題
 3. 2. 1 どうして若者と死の問題が関係あるのか
 3. 2. 2 死は今の一息一息の問題
 3. 2. 3 精神科医・頼藤和寛の耐病告白
 3. 2. 4 宗教学者・岸本英夫の「死を見つめる心」
 3. 3 死の克服こそ幸せのための大条件
4. ほんとうの幸福になるには
 4. 1 哲学青年藤村操の投身自殺が提起する問題
 4. 2 ハイデッガー哲学が示すもの
 4. 3 時代は、西洋から東洋へ

おわりに

参考・引用参考文献

はじめに

メーテルリンクが描いた『青い鳥』は登場人物のシルシルとミシルが幸せの象徴である青い鳥を探し求める物語であった。

私たちは幸せになりたい、言い換えれば毎日が満足した、充実した人生を送りたいと思っている。では私たちは果たして毎日が充実している、と思い生きているだろうか。戦後の焼け野原から立ち上がり、世界有数の経済大国となった今日の日本で、昨年まで13年連続で自殺者が三万人を越えた。政府は何とか自殺を食い止めようと具体策を講じるが、相変わらず自殺者は絶えない。金や物があれば幸せになれると信じられた時代は終わり、現代は心の豊かさが本当に求めるべきものではないかという声も聞こえてくる。

思えば今日ほど変化の激しい時代はなかった。原発の安全神話、食品偽装、警察官や裁判官などの不祥事、経済では日本型雇用システムの崩壊、など挙げれば切りがないがこれならば大丈夫、間違いないと思われていたものが次々に壊れていっている。変わりゆくものを信じて生きることは、ちょうど海に溺れている人が、海に浮かんでいる丸太や板切れにすがりついていることに例えられよう。それらにすがってやれやれと思っても、安心できるのは一時的で、一度大きな波が押し寄せると丸太や板切れに裏切られ、再び塩水を飲んで苦しんでしまう。

人生には、何が起きるか分からない。いつの世も生きることに不確実性が付きまとうが、とりわけ昨今の激変ぶりには、誰もが確かな明日を予測することは困難である。しかし、変化の激しい時代だからこそ、変わらないもの、揺るぎないものが、必要であろう。その揺るぎないものとは何か。変わらないものとは何だろうか。本稿のタイトルをほんとうの幸福とは何かとしたのも、こうした揺るぎない、変わらない幸せとは何なのかという意味を込めて、ただ単に幸福ではなく、ほんとうの幸福と名付けた。本稿ではこのテーマについて迫っていこうと思う。

第一章では高度経済成長から現代におけるライフコースの変化を説明する。望めば正社員になれた昔と違って、平成の世は、望んでも正社員にはなれなくなってしまった。その変化の背景にはどのようなことがあったのか。「フリーター」という言葉を端緒にして進めていく。

第二章では日本で起こった激しいライフコースの変化に伴い、今日「格差社会」や「世代間格差」が社会問題となり、たくさんのメディアで取り上げられている。それは書店に行くとなんべの本が書店を賑わしていることから分かる。そこでの論調は、今を生きる若者に対しては、同情や哀れみの視線が上の世代から向けられているように感じる。そうした世間の流れに反して2011年に出版されたのが古市憲寿の『絶望の国の幸福な若者たち』であった。古市憲寿はバブル崩壊以降の経済低成長期のただいまを生きるポスト・ロスジェネ世代の若者の一人である。彼は同書で現代の若者論を展開している。古市憲寿は同書の「はじめに」で「不幸な若者たちって本当？」という問いを投げかけている。低成長を続ける現代の日本を生きるポスト・ロスジェネ世代である古市憲寿は『絶望の国の幸福な若者たち』で、現在を生きる若者は、過去の若者と比べても「幸せ」と感じているという内閣府の「国民生活に関する世論調査」を提示し、回答している。

古市憲寿はポスト・ロスジェネ世代ということもあり、現時点ではより若者に近い立場からの考察であるため、現代の若者について最も知る手がかりになるだろう。この章では古市憲寿がいう「絶望の国の幸福な若者」はどのように描かれているかについて記述する。

第三章では『絶望の国の幸福な若者たち』で古市が示した若者像は、将来に対して希望が持てず、現状に「満足」せざるを得ない状況に置かれており、これが高い幸福につながっているのではないかと指摘した。これに対して未来が不安だから今が不安になるのではないかと問いを立て、次に私たちの100%確実な未来である死について詳述し、死を前にしても崩れない、ほんとうの幸せの条件を第三章では説明する

第四章ではほんとうの幸せになるためにということ、第三章で説明した「死」の大問題を克服するために私たちはどうすればよいのか、ハイデッガー哲学を代表する西洋哲学、日本古来より伝わる東洋哲学からその解決の道を探る。

1. 高度経済成長から現代におけるライフコースの相違

1. 1 高度成長期（昭和型）の生き方

「フリーター」という言葉は今や人々の間に広く定着している。この言葉ができた1980年代、日本は空前絶後のバブル景気に浮かれていた時代であった。バブル景気とは、1986年12月から1991年2月までの4年3ヶ月の間に起きた、資産価格の上昇とそれに伴う好景気のことである。この時の学生は就職に困ることは少なく、内定学生に対しては企業が他の企業に学生を取られないように接待漬けするのは当たり前だと言われている。「フリーター」は今でこそネガティブな意味で使われることが多いが、「フリーター」という言葉ができた1980年代は現在とは全く違った意味で使われていた。山田昌弘（2009）はこの時代を「男性なら、高卒でも引く手あまたで、望めば誰でも正社員になれた。正社員になったら、企業の敷いたレールに乗って自動的に昇給が期待できた。一方、女性は就職において差別されるが、学校を卒業すれば一般職正社員にはなれ、職場や見合いで自動的に正社員と結婚でき、主婦になっても、その後の豊かな生活が保障されるはずだと思えた時代である」（山田2009：13）と述べている。メディアもまた当時のこの空気を汲み取り「このような決まったレールの上を走るようなライフコースに対して批判的だった。これからは、会社や社会に縛られないで、自由に自分の能力を発揮する社会が来るはずという期待に胸が踊った若者も多かったに違いない」（同上）と述べている。「フリーター」という言葉が作られたのもちょうどこの時期であった。「フリーター」とは、フリーアルバイトの造語であるが、これを1987年にリクルート社のアルバイト情報誌「フロムエー」の編集長道下裕史が、新聞・雑誌・テレビなどでも頻繁に使われていたフリーアルバイトをフリーターと略したのが広く定着したといわれている。さらに彼は『フリーター』という映画までも制作し公開している。これらのことが示すように、当時の若者の感情としてとりあえず今は就職をして、将来は自分の能力が自由に発揮できる社会が訪れることを期待していたのだろう。実際に新入社員は選択の一つとしてその会社を選んだだけと言う意識があった

のである。

高度成長期の日本は「学校卒業＝就職」ということが当たり前になっていく過程であった。日本的雇用システムの特徴として挙げられるのは1、長期的安定雇用（終身雇用）2、年功賃金である。これら終身雇用制、年功序列制度などに象徴される日本型モデルがもたらしたのは、学校から企業の正社員となり、年次と共に昇給を重ね、定年まで企業人としての身分が保証される人が多くまた退社後も手厚い国民年金あるいは厚生年金等の社会保障により、安心した暮らしの実現であった。この時代の人は努力して「いい会社」に入れば「いい会社」に入社でき、「いい人生」が送れたのである。

そんな彼らの不安といえは、自分の人生の一部始終が早くから見えていることだった。そんな一本の真っ直ぐなレールの上を進むような人生を、鶴見済は『完全自殺マニュアル』では次のように表現している。「あなたの人生はたぶん、(中略)塾に通いつつ受験勉強をしてそれなりの高校や大学に入って、4年間ブラブラ遊んだあとどこかの会社に入社して、男なら20代後半で結婚して翌年に子どもをつくって、何回か異動や昇進をしてせいぜい部長クラスまで出世して、60年で定年退職して、その後10年か20年趣味を生かした生活を送って、死ぬ」。ちょうどこのように就職した途端、将来の行く先のすべてが見えてしまうのである。現代でもこのコースを辿るような人は一部いると思うが、退職金どころか来年の仕事があるかどうか分からない時代から考えると贅沢な悩みである。

1. 2 現代人のライフコース

バブル崩壊前の就職状況について述べると、1970年代から80年代の前半までは、日本の労働市場における新規求人倍率¹は0.9~1、有効求人倍率は0.6~0.7の間で推移していた。それがバブル経済に入ってから、企業が過剰な設備投資と雇用をおこなった結果、有効求人倍率は1.4まで跳ね上がり、その後1988年から1992年まで1を上回る状況が起きた。

反対にバブル経済が崩壊した1990年代半ば以降はどうなったのであろうか。景気が後退するなかで、バブル期の過剰な雇用による人件費を圧縮するために、企業は軒並み新規採用の抑制を始めた。しかし日本の場合企業が倒産の危機にでも直面しないかぎり、正社員の解雇は難しい。そのため企業の間で非正規労働者への需要が高まっていき、それに伴い新卒や中途採用の枠が抑制されたため、新卒時に正社員になれなかった若者が増えていった。また同時期には経済面でもIT化、オートメーション化、グローバリズムの到来による低価格の商品・低賃金の労働者が日本経済社会に押し寄せた。コンビニエンスストアやファーストフードなどサービス産業が生まれ、誰でもできるマニュアル労働の登場が、労働の低賃金化を促進した。

こうした経済の変化により一度正社員として就職できなかつた者、一度就職してその後退職してしまった者が、再び正社員に戻る事が非常に難しい状況が着々と形成されていっ

¹ 「新規求人倍率」とは、全国の公共職業安定所(ハローワーク)で、当月に受け付けられた新規求人数と、同じく全国の公共職業安定所(ハローワーク)で当月に求職者登録を行った新規求職者数から算出されます。

「有効求人倍率」とは、同じく新規求人数に前月から繰り越された求人数を加えた有効求人数と、新規求職者数に前月から繰り越された求職者数を加えた有効求職者数から算出されます。

たのである。よく耳にする「就職氷河期」という言葉もこの時期に生まれている。この言葉は1994年の第11回新語・流行語大賞で審査員特選造語賞を受賞している。先述の山田昌弘(2009)によれば、「こうした構造の転換は、これまでのように全ての学校卒業者が正社員として就職できることが不可能な時代の到来を告げるものであった」と論じている。

このような背景があり、有効求人倍率は1993年から2005年まで1を下回り、新規求人倍率は1998年に0.9まで下がった。バブル期に比べると、新卒者が困難な就職活動を強いられただけで、フリーターや派遣労働といった非正規雇用が増えていった。『朝日新聞』2009年7月12日朝刊描けぬ「職業人生」によると「学校から企業の正社員へ、というかつてのモデルも崩れた。80年代末のバブル期に注目された『フリーター』はその後も増え続け、厚労省の調査では、03年には217万人にのぼった。特に90年代半ばからの就職氷河期に正社員になれなかった人たちが中心の『年長フリーター』(25~34歳)は、雇用回復を経た08年にも87万人おり、不安定な就労環境に置かれたままだ」と述べられ、また若者の離職についても「厚生労働省の調査では、30年ほど前から20%前後で推移していた20代の離職率は、90年代半ばから上昇。20代前半では04年に初めて30%を超えた。中卒の7割、高卒の5割、大卒の3割が就職後3年以内に離職する『753現象』も定着。就職難の時代を迎える一方、就職間もない若者が次々と離職や転職をする状況も、顕著になっている」と記述している。そしてその背景を「過酷な職場、広がるあきらめ」だとし、「勤勉に働けば、定年までの雇用や昇格、昇給が保証された時代は過ぎ去った」と指摘している。

このように低成長を続けている日本で一番憂き目を見ているのが、「若者」である。バブル経済崩壊以降に日本に押し寄せてきた激しいライフコースの変化に伴い、今日「格差社会」や「世代間格差」が社会問題となり、たくさんのメディアで取り上げられ、書店に行けばたくさんの本が書店を賑わしていることが分かる。そこでの論調は今を生きる「若者」には同情や哀れみの視線が上の世代から向けられているように感じてならない。そうした世間の流れに反して2011年に出版されたのが古市憲寿の『絶望の国の幸福な若者たち』であった。古市憲寿はバブル崩壊以降の経済低成長期のただいまを生きているポスト・ロスジェネ世代の若者の一人である。彼は同書で現代の若者論を展開した。次章ではこの『絶望の国の幸福な若者たち』が問いかけるものについて詳述する。

2. 『絶望の国の幸福な若者たち』が問いかけるもの

2. 1 現代版若者の幸福論

古市憲寿は同書の「はじめに」で「不幸な若者たちって本当？」という問いを投げかけている。低成長を続ける現代の日本を生きるポスト・ロスジェネ世代である古市憲寿は『絶望の国の幸福な若者たち』で、現在を生きる若者は、過去の若者と比べても「幸せ」と感じているという内閣府の「国民生活に関する世論調査」を提示し、回答している。

古市憲寿はポスト・ロスジェネ世代ということもあり、現時点ではより若者に近い立場からの考察であるため、現代の若者について最も知る手がかりになるだろう。この章では

古市憲寿がいう「絶望の国の幸福な若者」はどのように描かれているかについて、曾和信一（2012）の論考をもとに詳述する。

2. 2 幸福な若者の正体

古市（2011）は、現代の幸福な若者たちの正体は将来に対して希望が持てず、現状に「満足」せざるを得ない状況に置かれており、これが高い幸福につながっているのではないかと指摘した。つまり将来への希望のなさが現在の幸福感につながっていると解釈している。ではこれは本当に正しいのであろうか。本章ではこのことについて検討していく。

まず古市によれば現在の若者たちは将来が不安だから現在の幸福感につながっていると言う。これは一見矛盾しているように思えるが、そのことについて、古市は元京都大学教授で社会学者である大澤真幸氏の言説によって、次のように「幸せ」な若者の正体を述べている。

元京都大学教授の大澤真幸（五二歳、長野県）は、調査回答者の気持ちを以下のように推察する。人はどんな時に「今は不幸だ」「今は生活に満足していない」と答えることができるのだろうか。大澤によれば、それは、今は不幸だけど、将来はより幸せになれるだろう」と考えることができる時だという。

将来の可能性が残されている人や、これからの人生に「希望」がある人にとって、「今は不幸」だと言っても自分を全否定したことにはならないからだ。

逆に言えば、もはや自分がこれ以上は幸せになると思えない時、人は「今の生活が幸せだ」と答えるしかない。つまり、人はもはや将来に希望を描けない時に「今は幸せだ」「今の生活が満足だ」と回答するというのだ。

また「今日よりも明日がよくなる」と思う時、人は「今が幸せ」と答えるのである。これで高度成長期やバブル期に、若者の生活満足度が低かった理由が説明できる。彼らは、「今日よりも明日がよくなる」と信じることができた。自分の生活もどんどんよくなっていくという希望があった。だからこそ「今は不幸」だけど、いつか幸せになるという「希望」を持つことができた。

古市によれば「幸せ」な若者の正体はコンサマトリー（自己充足的）で「今、ここ」の身近な幸せを大事にする感性であると言っている。日本社会のコンサマトリー化について古市は「経済発展が至上命題であった高度成長が終わり、公害など経済成長の負の側面が顕在化し、オイルショックにより、経済成長がマイナスに転じた一九七三年頃に、この国に一つの転機が訪れたのは間違いがない。その意味で、日本社会のコンサマトリー化は一九七〇年代から徐々に進展してきたと言える。ただし、一九七〇年代と二〇一〇年代がシームレスに地続きというわけではない。一九八〇年代にピークを迎えた受験戦争に象徴されるように、一九七〇年代と一九八〇年代は日本中が『いい学校、いい社会、いい人生』という『中流の夢』に支配された、メリトクラシー²と組織化の時代だったと言える。それはコンサマトリーな価値観を持った若者も『企業』で『社畜』として働くことで『若者』

² メリトクラシーとは、身分や家柄ではなく「能力」のある人が社会を支配する仕組みのことで、通常日本語では業績主義と訳される。

を卒業していく時代であった。ただ一九九〇年代以降、『中流の夢』が壊れ『企業』の正式メンバーにならない若者が増えていく中で、いつまでもコンサマトリーでいられる若者が増えていったことが予想される。しかも、『失われた二〇年』と言われる一九九〇年代以降、なぜか急に生活満足度が上がっていく」（同上:106）と指摘し、続けて現代の若者が幸せな理由の一つとして「仲間」の存在を挙げている。さらに一九九〇年代以降顕著になったものとして、「友人」や「仲間」の存在感が増してきたことを挙げている。社会学者の山田真茂留（三八歳）も、現代の若者がアイデンティティの根幹を、身近な人間関係など様々な「関係や集団の参与それ自体」に求めるようになったと指摘する。現代の若者はまるでムラに住む人のように、「仲間」がいる「小さな世界」で日常を送る若者たちであり、これこそが、現代に生きる若者たちが幸せの理由の本質であると述べている。

ここまでをまとめると若者は、「社会」という「大きな世界」には不満があるが、仲間内の「小さな世界」には満足している。「今、ここ」で、「仲間」たちと生きる若者は「村々」しているから幸せであるというのである。

その一方で「ムラムラ」する気持ちを抱えながら、仲間と「村々」しているが、震災ボランティアに象徴されるように、「村々」を打破してくれる「非日常」と出会うと、「ムラムラ」してチャレンジしていくのである。しかし非日常は長く続かず、やがて日常化する。

古市氏は、日本国憲法第二十五条に「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定められているところから、「健康で文化的な最低限度の生活」とは、「Wii が一緒にできる友達のいる生活」や「モンスターハンターを楽しむことができる生活」あたりが妥当であると考えたことがあると述べている。つまりこれは Wii や PSP を買えるくらいの経済状況で、それを楽しむことができる社会関係資本（つながり）を持っていれば、だいたい人は幸せなんじゃないかと考察している。

古市は若者の幸せの条件として「経済的な問題」と「承認の問題」の二つに分けて論じている。一つ目の経済的な問題については、現在の若者が厳しい社会状況に置かれているのは、本稿でも第一章で取り上げた。しかしいくらそう言っても、日本でいくら若者の貧困問題を語ろうとしても、どこかリアリティがないと感じている。古市は厚生労働省「平成二十一年人口動態統計」から日本における餓死者を示しているが、二〇〇九年には一六五六人だったが、そのうち二〇代は四人、三〇代でも一五人に過ぎないことが分かる。街を歩いていても、若者は小奇麗な格好をして幸せそうに歩いている。決して安くはないスマートフォンを、芸人から大学生から道路工事のお兄ちゃんまで持ち歩いている。それを古市は「僕たちの社会は、一見あまりにも豊かなのだ。若者たちは、一見あまりにも幸せなのだ」（同上:243-244）と述べている。

若者の貧困問題が見えにくい理由として、貧困が現在の問題というよりも、将来の問題だからという。正社員と非正社員となった若者の違いは「何か」あった時に明らかになる。「たとえば、病気になった時、結婚や子育てを考えた時、親の介護が必要になった時。社会保険に入っていたか、貯金があったかなどによって、取れる選択肢は変わってくるという」（同上:245）。そうした「何か」あった時、若者はどのように乗り切るのだろうか。

古市は日本においては家族という最強のインフラに支えられて、家族福祉の恩恵を受けているからでもあるという。「今の二〇代や三〇代の親は五〇代から六〇代。まだまだ現役で働いている人も多く、介護が必要な年齢にも達していない。しかも彼らには総じて、お

金もあって家もある。世帯主が五〇代の家の平均貯蓄は一五九三万円、六〇代だと一九五二万円になる。また平均持ち家率は五〇代で八六・七％、六〇代で九一・三％である」(同上:245)。こうした親世代の恩恵を受けている若者は現在の、貧困を感じさせなくさせ、その結果として「わかりにくい貧困」となるのである。若者にとって貧困は親世代が退職し介護問題に直面するまでの未来の問題である。

それに対して、後者の承認の問題は現在の問題である。将来の経済的「貧しさ」よりも現在の承認に関わる「寂しさ」の方が多くの若者にとって切実な問題であると指摘している。その承認の問題は、多くの若者にとって「未来の問題」である経済的な貧困と違って、比較的「わかりやすい」形で姿を現すものである。その問題を考えるうえで欠かせないのが、恋人と友人の存在の有無である。恋人がいれば、全人格的な承認をその人に与えてくれる。恋愛はその人が抱えるほとんどの問題を少なくとも一時的には解決してくれる。たった一人から愛されるだけで誰もが「かけがえのない存在」になることができるからである。若者にとって「恋人がいらない」「友人がいらない」というのは私たちが思っている以上に切実なのである。

現代の日本は恋人や友人に依存しない形で、僕たちの承認欲求をみたしてくれる資源を無数に用意している。それがツイッターやニコニコ動画など、若者にとっての手軽なメディアに代表される多様なツールを通して、承認欲求を満たせられる。このことを古市は「ツイッターでは、たとえ無名の人であっても、面白いことをつぶやけば何百人もの人がリツイートしてくれる。面白いことをつぶやき続ければフォロワー数はどんどん増えていく。かつては作家や著名人しか味わえなかった『自分の発言することが数千人、数万人に読まれている』という感覚を、多くの人が味わえるようになったのだ。ニコニコ動画も格好の承認の供給源である。好きな動画にコメントを投稿するだけでも他者と『つながっている』感覚を得られるのかも知れないが、自ら動画を投稿することによって、それまで無名だった人に数千人のファンがつくこともある」(同上:250)と古市は分析する。

しかし彼自身も指摘しているように、「もっとも、残念ながらどんな関係も、どんな居場所も、現代社会ではとても壊れやすい。友人関係や恋人関係というのは、何の制度的な担保もない以上、壊れる時はすぐに壊れる」(同上:252)のものであるが、そのことがむしろ「自分が付き合うコミュニティを自由に選択していくことができる。複数のコミュニティに所属してもいいし、参入や離脱も自由だ。ルールがなくてもゆるく続いていく関係」(同上:253)を生み出すのである。そうした実利利益から離れたコミュニティが増大することで、承認が分散され、アイデンティティが保障されることが重要である。そのようなコミュニティがあれば、若者たちは社会問題を解決しなくても生きていけるようになるのである。

彼は著書の中で、「物はないけれど心の豊かさがあつた戦後に誰が戻りたいだろうか。国から数百万人の人の命が失われ、誰もが誰かを亡くし、貧困や犯罪、不衛生が日本中にあふれていた時代に？世界有数の経済大国に上り詰めた高度成長期に戻りたいだろうか？庶民がインフレに苦しみ、公害が深刻になり、都市が光化学スモッグに覆われたあの時代に？日本がわけのわからないお祭り気分に含まれたバブル期に戻りたいだろうか。地価や物価が高騰する中で、今から見ればしょぼい『シティーホテル』でまずい『フランス料理』を食べて『トレンドィ』をしていた時代に？そもそも、いくら『あの頃』に戻りたいと願

ったところで、もう『あの頃』は訪れない」(同上:262-263)という。

そして古市は最後に「絶望の国の幸福な若者たち」について、次のように結んでいる。

戻るべき「あの頃」もないし、目の前に問題は山積みだし、未来に「希望」なんてない。だけど現状にそこまで不満があるわけじゃない。

なんとなく幸せで、なんとなく不安。そんな時代を僕たちは生きていく。

絶望な国の、幸福な「若者」として。(同上:268-269)

3. ほんとうの幸福とは何かその条件

3. 1 未来が不安だから今が不安になる

古市のいう幸福観は「今、ここに」を重視する若者の心境を描いたものである。経済の成長期では、今日よりも明日の生活にもの豊かさがあると実感し、また実際に確信できたからこそ、未来に希望が持てた。それに対して「今、ここに」に生きる「絶望の国の、幸福な若者」は未来に希望を思い描くことができないからこそ、不安を抱きながらも現状を肯定せざるをえないと考えられる。すでに示したように古市は現代の幸福な若者たちの正体は将来に対して希望が持てず、現状に「満足」せざるを得ない状況に置かれており、これが高い幸福につながっているのではないかと指摘した。ではこの指摘は本当に正しいのであろうか。本章のテーマである。確かに多くの調査が示すようにどうやら現代の若者は幸福を感じているらしい。この原因を一言でいうなら将来が暗いから今が明るく思うようになると言える。「いま、ここに」を重視する生き方は人生全体での幸せを求めるものではなく、古市も指摘している通りやがて崩れる幸せである。それらは一時的で、崩れたらまた次の幸せを求めていくものである。本章では古市のいう幸福観について批判的観点を加え、ほんとうの幸福についてまずその輪郭を示したい。

繰り返すが古市は現代の若者は将来が暗いから今が明るく思うようになるという。これはどうなのか。私たちは未来が明るいと思えるか、現在が明るいと思えるか。反対に将来が暗いと現在もまた暗くなるのではないか。例えるなら一週間後に自分の人生がかかった大事な試験を控えた人がいる。その人の心境はどうであろうか。きっとその試験のことが頭から離れず、試験は上手くいくだろうか、試験に失敗したらどうしようなど様々なことが思われ、不安な気持ちでいっぱいであろう。また次のような話はどうだろう。あと数日で大手術を控えた患者が、まだ数日あるのだから気楽にいこうやないかと言われて、明るい心境でいられるだろうか。これもまた数日後の手術が心に暗い闇をおとしていることは容易に想像ができる。反対に大好きな人と来月に温泉旅行へいくことが決まったら、決まった日からその日が待ち遠しくまさに指折り数える日々をその人は過ごせるに違いない。

以上の話からも日々私たちは常に将来の状況に左右されて生きていることが、誰にでも分かるだろう。私たちを不安にさせるのは「ちゃんと仕事につけるだろうか、この会社ではたして定年まで働けるだろうか、老後に年金がもらえるか不安である」などといったことであるが、つまりこれらは全て未来のことである。私たちはその未来に何が待っている

かをいつも知りたいと思っているが、どうもその将来がよく分からない。先行き不透明な今日では、なおさらであろう。現代人が当るかどうかはっきりしない占いにすがりた心境からだと考えられないか。

これだけ科学技術が進歩したこの現代社会において占い師の数はどんどん増えていて、有元裕美子著『スピリチュアル市場の研究』(2011)によれば、現代の占いなどの「スピリチュアル・ビジネス」はそれらに関する統計が整備されていないので正確な実態は把握しきれていないと断った上で、一般に一兆円規模とも言われるほどの一大産業となっていると述べられている。一兆円といえばペット関連市場と同程度、化粧品市場の半分程度に該当する規模と言われる。「占い師」は古代オリエントの昔から今日までずっと続いている職業の一つで、いつの時代にも、どこの国にも「占い師」にあたる職業はあった。現代でも同じことで、ネットでやり取りしていると、占いのサイトやアプリが氾濫していることが分かる。亀の甲が割れた方角で政治を決めていた古代ならともかく、SNSやスマートフォンなどの最新技術に乗って流れてくるこの占いの数々をみると、それだけ日々が苦しくて、とにかく癒されたい現代人の状況が垣間見えるようである。

当るも八卦当らぬも八卦ということわざがあるように、占いは当たることもあれば当たらないこともあるというものである。そんな不確かなものを信じて安心しているのが現代人なのである。

ところがそんな「占い」でも100%あたる占いがある。それは「あなたは100%確実に死ぬ」ということである。誰の人もどのような人生行路を歩もうが行き着く未来は死ぬことということである。室町時代の禅僧一休はこのことを「門松や冥土の旅に一里塚めでたくもありめでたくもなし」と歌っている。これは一休が元旦に詠んだ歌であるが、お正月になるとみんな「おめでとう、おめでとう」と言っているが、そんな人たちを見て一休は「冥土に旅の一里塚」なのだと言っているのである。冥土³とは死後の世界のことで、お正月ということはそれだけ死に大きく近づいたということになる。それを一休はどこがめでたいのかと皮肉をこめて歌っているのである。

一休が歌うように死は私たちの確実な未来であるにもかかわらずこの死の大問題を考えていない人はあまりにも多い。死を考えないと言うことは生をあまり考えていない人だとも言われる。それは生と死が、紙の表と裏のように、表裏一体をなすものだからである。このことについて次節では検討したい。

3. 2 生と死は切り離せない問題

3. 2. 1 どうして若者と死の問題が関係あるのか

さて本章を読んだ人の中にはどうして若者と死の問題が関係あるのかと疑問に思われる方も感じる。その疑問に答えておく必要があるかと思う。単純に考えると若者と死が関係あるようには思えない。死ぬのは年寄りだと思える人が多いからか、あるいは平均寿命までは生きられると思っているのであろうか。

³冥土の冥は片明かりということである。反対側からはよく見えるがもう反対側からは見えないということである。ちょうどすだれやマジックミラーのようなものである。

実際はどうかというと、自分より若い人が亡くなるニュースを聞かない日はないのが現実である。2012年の交通事故死者数は4411人であった。これは1日平均で12.05人、2時間ごとに1人が死亡したことになる。多くの人が交通事故で亡くなっているにも関わらず、次はその数に自分が入っているかもしれないなどとは全く思っていない。東京の電車はよく人身事故で止まるが、ほとんどは自殺である。「鉄道の人身事故、関東で増加、年間600件で毎日1人以上が自殺～自殺者特定の恐れも」という記事によると「国内の鉄道自殺は毎年500～600件台で推移している」とある。関東でも昨年376件の鉄道自殺（未遂含む）が発生しており、これは毎日1人が鉄道自殺している計算になる。

こうした交通事故死や鉄道自殺など、死からの警告は日々耳に入ってくるのに、それを私たちは他人事のように聞いているために、直接自分の問題として結びつけて考えようとはしない。

ではなぜ死は他人事になるのだろうか。まずは人がなかなか死ななくなったことが考えられる。平均寿命は格段と延び、2012年現在、男性が79.94歳、女性は86.41歳である。昔であれば道端に死体が放置されていた時代もあったが、直接私たちが死体を見る機会は極端に減った。今日では病院で最期を迎えることは当たり前のように思われているが、50年ほど前の日本では病院や施設で死を迎えることは珍しく、住み慣れた家（自宅）で最期の時を過ごすことが一般的であったことも考えられるだろう。厚生労働省医政局指導課が平成24年に調査した『在宅医療の最近の動向』の「死亡場所の推移」によれば、1951年に在宅死は全体の82.5%であった数値が、2009年では12.4%となった。その一方で病院死は1951年が9.1%であったのが、2009年には78.4%となっている。死は私たちの生活から遠ざかり、見えにくいものになっている。死を生活の外へ外へと送り出したことにより、死を身近に感じる機会が、限りなく失われたのである。

また金沢大学の医学部教授である細見博志氏は別の視点から指摘している。「私たちは『死んだ自分』という意味での自分の死を考えることはできない。考えられるのはせいぜい、死んだ自分ではなく、死にゆく自分であり、自らの臨終である。これならば矛盾はない。しかし他者の死なら、その臨終のみならず死んだ状態も含めて、考えることはできるし、場合によれば経験することもある」（細見編2004:20-21）

自分の死は考えることはできない。いつも耳にするのは他人の死であり、自分に近い人が亡くなった時は、背筋が凍る思いがするが、それも時間の経過と共に薄れていく。私に分かるのはあくまで二人称の死であり、いくら考えても一人称、私の死は分からないのである。このことをうまく表した話に兼好法師の『徒然草』第41段がある。この話はいかに死が他人事になっているかが分かり易く表されている。以下訳文である。

五月五日に上賀茂の競馬を見物したときのことである。わたしの乗った牛車の前に一般の人たちが大勢立って全く競馬が見えなかった。そこで、わたしたちは全員車から降りて馬場の柵に近づこうとした。しかし、あたりはたくさんの人でごった返していたので、誰もかき分けて入っていけそうになかった。

このとき、馬場の向こう側で梅檀（せんだん）の木に登って木の股に腰をかけて見物している一人の法師がいた。ところが、その法師は木につかまっではいるものの、こっくりこっくりと居眠りをしていて、木から落ちそうになると目を覚ますということを繰り返

返していた。

この有り様を見たある人がこの法師を馬鹿にして「なんて愚かなやつだろう。あんな危ない木の上にながら、のんきに居眠りをしているよ」と言った。

それに対してわたしは思いつくままに「わたしたちの命の終わる時は今この瞬間に来るかも知れないのに、それを忘れて物見遊山をして一日を過ごしているわたしたちの方が、愚かな点では遥かにまさっているのに」と言った。

するとわたしの前にいた人たちが「まことにそのとおりでございますね。本当に愚かなのはわたしたちでございます」と言いながら、みんなで後ろを振りむいて「ここにお入りなさいませ」と場所を空けてわたしを呼び入れてくれた。

この程度の理屈なら誰でも思いつくものだが、場合が場合だけに、思いがけない気がして胸を打つところがあったのかもしれない。人間は情で生きているから、何かの折に感動するのは珍しいことではないのである。⁴

まじめに自分の死の問題を考えていないどころかすっぱりと死が抜けているのはこの話で出てきた人たちだけでない。パスカルは著書『パンセ』199の中で、人間を死刑囚に例えている。彼は人間を鎖につながれながら死を待つ存在であるといっている。「(私たちは) 何人かが毎日他の人たちの目の前で殺されていく。残った者は、自分たちの運命もその仲間たちと同じであることを悟り、悲しみと絶望とのうちに互いに顔を見合わせながら、自分の番が来るのを待っている」状態であるとパスカルは述べている。宗教学者の岸本英夫は「(私たちは) 理論的には、死刑囚と同じ立場にありながら、死の恐怖に、心をおびやかされることなく、生きてゆくことができるのである」(岸本1964:151)という。

私たちは必ず死に帰す存在であり、どんな人も少なくとも100年以内にはこの世には存在していない。生死の問題が全人類にとって避けては通れない問題になるのはそのためである。しかしこう聞いてもまだ私は若いしまだまだ丈夫だし健康にも気を使っているから関係ないという人もいるかと思う。次はこの疑問に答えておこう。

3. 2. 2 死は今の一息一息の問題

「確かに私は必ず死ぬけど、それは遠い未来のことで今は元気だから大丈夫。そんな暗いこと考えなくても十分楽しく生きられるよ」とほとんどの人が思っている。みんな明日があると思って生きているし、明日がないと思ったら今立てている来月の旅行の計画など誰も考えないに違いない。なぜなら来月旅行に行っている私は、その場には存在していないからである。

私たちはみな明日があるということの大前提にして生きている。政治や経済、科学、医学、倫理、道徳など人間の営みすべては、この明日があるということ为前提にして成り立っている。この明日があるという心は明日になればまた明日ありと、またその次の日になっても明日ありとなるため、この心は永遠に死なない心になる。例えるなら自分の影を踏

⁴世界の古典つまみ食い「新訳もの狂おしくない『徒然草』」

〈<http://www.geocities.jp/hgonzaemon/turezuregusa.html>〉(最終アクセス2012.11.29)

むようなもので、自分が進めば影も進んでいくため、自分で影を踏むことは絶対に出来るものではない。私は頭ではいつかは死ぬとは理解しているが、実際のところ自分が死ぬとは全く思っていないのが私たちの実態である。

岸本はこのことについて「人間の、生きるということに対する自身には、驚くべきものがある。あす知れぬ身でありながら、健康である限り、人間の心には、死の影がささない。死の不安がない東京の国電のプラットホームに酔いしれて、ベンチに深々と眠っている人の姿には、生活への戦いの痕は深く刻まれている。しかし、死の影はない。きょう一日を生きて来たごとく、あすもまた生きてゆくことは、彼にとって問題の余地もないことである。当然のこととされているのである。その点、人間は、限りなく楽天的な生物だといってもよい」(岸本 1964 : 151) と答えている。

また徒然草第 155 段⁵には「死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覺えずして来る」とある。この文の意味は「死は何の順序にも従わずにやってくる。死は前から来るとさえも決まっていない。死は同時に後ろからも近づいているからである。人は自分がいつか死ぬことは知っているが、それほど急に死ぬとは思っていない。ところが、死は突然やってくる」ということである。誰かにあなたは今日死ぬと思いますかと尋ねると全く相手にされないか、あるいは鼻で笑われるはずである。2011 年の大震災の時に、今日自分が死ぬ日だと思って午前中を過ごした人は一人もいないであろう。しかし間違いなくその日の午後に津波に遭った人がいて、その人たちには明日という日は来なかったのである。「いつまでも生きるつもり顔ばかり」で周りを見渡してみても、今日は死なない明日も死なない顔をしている人ばかりである。在原業平は伊勢物語の中で「ついに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思わざりしを」と歌い、いずれは死ぬとはかねてから聞いてはいたが、その死が昨日今日にやってくるとは思わなかった、という心境を語っている。死が来る時はいつも今日なのである。

私たちは死を遠くに眺めていて、一見、死なないかのように生きている。では実際の人間の寿命は一体どれほどの長さなのか。『四十二章経』という経典には次のような話がある。釈尊が修行者たちに命の長さについて尋ねているところから始まっている。修行者の一人は「命の長さは五・六日間でございます」と答えた。次の一人は「命の長さは五・六なんてありません。一食事をいたす間位のものでございます」と答える。また次の修行者が「命の長さは一息つく間しかありません。吸った息が出せなかつたらそれでおしまいです」と答えると、釈尊は最後の答えに大いに称讃された。「そうだ、そなたのいう通り命の長さは、吸った息が出るのを待たぬほどの長さでしかないのだ。命の短さが段々に身にしみて感じられるようになるほど、人間は人間らしい生活を営むようになるのだ」と仰ったと記されている。ここではなぜ人の命は吸った息が出るのを待たぬほどの長さでしかないと言われているのだろうか。これは今の一息一息に生と死が触れ合っているということを意味している。吸った息が吐き出せなければ、吐いた息が吸えなければその時から死である。死は遠い未来のことではなく、今現在の一息一息に触れ合っている問題なのだ。

「死は突然にやってくる。いや、むしろ死は、突然にしかやって来ないといってもよい」

⁵ 同上 (最終アクセス 2012. 12. 7)

(岸本 1964:158) と言ったのは、宗教学者である岸本英夫であるが、さっきまで動いていた車が急に動き出さなくなるように、人間も同じで、さっきまで元気であった人が、急に亡くなってしまうのである。そういえば、東京都健康長寿医療センターの調査によれば、入浴中に突然、心肺停止となって亡くなった人は、平成 23 年の 1 年間で高齢者を中心に、全国で約 1 万 7000 人にのぼるそうである。一日の疲れを癒す場所である浴槽がその人を死に至らしめたという話を聞くと何と皮肉なことだろう。

また岸本は続いて「いつ来ても、その当事者は、突然に来たとしか感じないのである。生きることに安心しきっている心には、死に対する用意が、なにもできていないからである。現代人の場合には、ことに、そうである。平生、死を全く忘れていて、死に直面すると、あわてふためいて、なすところをしらない。しかも死というものは、ひとたび来るとなると、実に、あっけなく来る。まことに無造作にやって来る。無造作であるばかりでなく、傍若無人である。死は、来るべからざる時でも、やってくる。来るべからざる場所にも、平気でやってくる。ちょうど、きれいに掃除をした座敷に、土足のままで、ズカズカと乗り込んでくる無法者のようなものである。それでは、あまりムチャである。しばらく待てといっても、決して、待とうとはしない。人間の力では、どう止めることも、動かすこともできない怪物である」(同上:158) と述べている。

死が訪れた時に、人生は急激に変化する。この死がチラリと自分の中によぎった時、一切の楽しみや喜びは消え失せて、今まで私を幸せにしていたものが音を立てて崩れていく。なぜならそれら一切は、私が生きているという土台の上に成り立っていたものだからである。全ては私が生きている場合に限って、幸せを与えてくれるものであって、死という怪物がやってきた時にはひとたまりもない。

平穏な人生に一度死が訪れると、その人の人生観はガラッと転換する。では人は実際に死に直面するとどうなるのだろうか。次項では死の影によって人生観が一変しながら、その恐怖と向き合い詳細に死について記述した人として一人目に精神科医である頼藤和寛の告白から、二人目に宗教学者の岸本英夫の証言から迫っていく。

3. 2. 3 精神科医・頼藤和寛の耐病告白

ここでは実際に死の恐怖に向き合い、死に直面すると人間はどうなるのかについて、二人の人物の告白から迫ってみたい。まず頼藤和寛の耐病告白『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』から見ていこうと思う。

精神科医である著者は、1947 年に大阪市に生まれ、大阪大学医学部を卒業し、麻酔科、外科を経て精神科への所属になった。その彼が五十二歳になった時にガンの宣告を受けた。同書に書くにあたって、「精神医学の知識や経験は一人のガン患者として大して役に立たなかった。むしろ筆者の場合、若い頃に麻酔科や外科を経験していたことのほうが役に立ったように思う」(頼藤 2001:8) と述べ、病名が分かっただけからはガン関連記事や素人のガン体験記のたぐいや代替医療に関する情報にも目が吸い寄せられるようになったと言う。筆者はその原因を今までは他人事であったのが「他人事ではなくなったためであろう (中略) これまでハッキリ言って他人事だったのだ」(同上:8) と分析している。精神科医としてガンの宣告を受けた心境を、克明につづっている告白記である。

「これまで平気で歩いてきた道が実は地雷原だったと教えられ、これから先はもっと危

ないと注意されたようなものである。それでも時間の本性上、退くことはおろか立ち止まることもできない。無理やり歩かされる。次の一步が命取りなのか、あるいはいづれ先ほうまで地雷に触れないまま進めるのか。いづれにせよ、生きて地雷原から抜け出すことは出来ない」(同上:182)。そして死を意識した目には、周囲が全く違って映じたと言う。「街を歩いても、すれちがう人々はたいていわたしより長く此の世にとどまるだろう人々である。これを思うと一種の疎外感を禁じ得ない。以前なら高齢者を見かけても、まさか自分が彼らより先に逝くは想像しなかった。いや、鳥や昆虫でさえ、それが越冬や冬眠をする種類なら、ひょっとしてこやつらのほうが長生きかもしれないなどと疑う。余命で負けない自身のある相手といえば鮮魚コーナーでヒゲや脚を動かしている活けエビ活けカニぐらいのもので、さすがにわたしのほうは今夜中に焼かれたり、蒸されたりはしないはしないだろうと、ようやく優越感に浸れるのである」(同上:169)。

身近なものに感傷を覚え、「手に取って重さをはかる。私がいなくなっても、まだここにあるはずのこのプラスチック製の粗品」また「故障する機械は嫌ってお払い箱にすることが多かったが今となっては妙な親近感さえ感じてしまう」(同上:173)と言っている。さらに「確かに自分の死期はだれにもわからないが、少なくともそれをある程度知ってしまった者と「知らずにいられる」者との間には、たぶん人種やカーストの違い以上の、いや、ひょっとすると動物の種の違い以上の隔りがあるのではなかろうか」(同上:172)と感じるほどの変化であったと告白している。

この先、どう生きればよいのか。やがて、はぎ取られる「人生の詰り物」(同上:177)(地位や金銭など)で時間を埋めるなら、意味はない。死を前にしてみると人間は死ぬまでにせねばならぬことなど皆無と感じ、次のように書いている。「つまり、わたしはいつ死んでもいいのである。いや、これまでだって絶対生きてこなければならなかったというわけではない。妻子の生活はどうなる、と言われてもそれなら独身時代に死んでおけばよかったのだ。親はどうなる、と言われるなら(母が)流産してしまうか、赤ん坊の頃に死ねばよかった。すぐに次のを作ることでもできただろうから問題はなかろう(中略)私に必要なのは、自分が死ぬまでに仕上げておかなくてはならないものがあると勝手に思い定めることだけである。生きる理由というのは外を探してもどこにもない」(同上:178)。

死を前にすれば、貧富や才能、仲間など日々私たちがほしいと思っていることやまたそれによって私たちが幸せだと感じていることなど一切が色を失ってしまう。そうすると私たちの一生を著者は「してみると生前の大騒ぎは畢竟、一場に喜劇に過ぎなかったのだ」(同上:188)と今まで何のために生きてきたのかうかうかと過ごしてきた五十余年を悔いて言う。そして最後に「寿命の長短にかかわらず酔生夢死をどう防ぐかがわれわれ全員の課題である」(同上:159)と記述しているが、死という大事に気付きながら、解決法が分からずどうすることもできずただ自分の悲痛な人生を受け入れざるを得なかった一人の医師の告白書であった。

3. 2. 4 宗教学者・岸本英夫の『死を見つめる心』

今から約60年前東大教授であった岸本英夫は、日本の宗教学の開拓者であった父親、岸本能武太(のぶた)の影響から、東京帝国大学の宗教学科に進学し、宗教学を研究するようになった。戦後東京大学の教授になってからも様々な著作を残し日本の宗教学に大いに

貢献した人である。その岸本が1954年にアメリカのスタンフォード大学に客員教授として赴いたときに、ガンが発見された。当時岸本は51歳であった。それから彼がガンと向き合った10年間を描いた『死を見つめる心』は壮絶である。日本ではガン告知が行われていなかった時代に、アメリカではガンの告知が当たり前で、当然岸本は大きな衝撃を受けた。そのまま現地で手術を受けることになり、担当した医師からは無事にガンは取り除かれ手術は成功したことを告げられる。

帰国した直後の彼は一見、ガンという事態に少しも動揺せず、死に対して少し恐れず従容しているように見えた。しかしあと半年の命と医師から告げられた彼は次のように告白している。「ソファーに腰を下ろしてみたが、心を、下の方から押し上げてくるものがある。よほど、気持ちをしっかり押さえつけないと、ジッとしていられないような緊迫感であった。われしらず、叫び声でもあげてしまいそうな気持ちである。いつも変わらない窓の外の暗闇が、今夜は、えたいのしれないかたまりになって、私の上に襲いかかって来そうな気がした」(岸本1964:64)。彼はガン告知と言う予想もしない事態に直面して心が激しく動揺していたのである。そして揺れ動く心を何とか抑えようとして色々な試みをする。まずバスに湯を張り、そしてゆっくり時間をかけて入浴した。風呂から出ると、床の絨毯の上に坐って足を組み、座禅をした。そしてベッドに入る時には、催眠剤を飲んだ。そうするといつの間にか朝を迎え、岸本は「しめた」と叫んだと言っている。

それから手術までの三週間の間は彼にとって異常な経験であったと告白する。彼の言葉によれば「心の中では、寸時の絶え間もなく、迫ってくる死の足音に耳を澄ましている。死を凝視した生活である。しかも表面は、健康そうに、普通の活動をする、そういう異常な生活が続けられた」(同上:75)のである。

さらに戦時中の空襲警報を思い出し「癌の場合、ある意味では空襲警報より、もっと始末が悪かった。空襲警報の場合には、警報解除ということがあった。警報中もやがて解除になれば、ほっと一息つけるという楽しみがあった。しかし、今度の癌とのたたかいはあっては、それが無い。警報解除ということが無い。朝から晩まで、心は、緊張しつづけている。これは、まったく、容易なことではなかった」(同上:76)と告白している。

またこうした不安な緊張の中で彼はしばしば死刑囚のことを思ったという。「死刑囚は死を宣告されて、しかも独房にいななければならない。何時、刑を執行されるかわからない不安な状態で、死を見詰めながら、二年も三年も置かれたら、いったい、どういう精神状態になるだろうか。予告された死の苦しみは、実際に刑が執行される時だけのものでは、断じてない。死の苦しみは、予告されたその刹那から、はじまる。それ以後は、三日生きればその三日間が苦しみである。十日生きればその十日間が、必死の激しいたたかいである。わずかに二週間のたたかいですら、私は、相当にまいった。私自身も死刑囚のような気持で、ほんものの死刑囚に深い同情を寄せざるを得なかったのである。そのように、私の内心は、絶え間ない血みどろのたたかいの連続であった」(同上:77)。

彼は生死観を語る時に生命飢餓状態という概念を使っている。生命飢餓状態とは「腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる脅威におびやかされて、いてもたってもいられない」(同上:12)状態のことである。この心が起きるのは、「死が目の前に迫り、もはやまったく絶望という意識が心を占有したとき」(同上:13)であり、反対に起きないのは「生命を満喫しているから」(同上:148)で

ある。しかし「ひとたび、生命の安全がおびやかされ生命の危険が意識される場合が来ると、生への執着は、にわかに、その頭を持ちあげてくる。そして牙をむき出して、人間の心からみついてくる」(同上：149)。

岸本は不老長寿の薬を探し求めるために、わざわざ、使いを日本まで派遣した秦の始皇帝の話を出している。それは「子供の夢にも等しいこと」「しょせん、達することのできないあがき」と言っているが、しかし「現代人は、あえて、これを嘲笑することができるだろうか。現代人が死に立ち向かった場合に、秦の始皇帝より、少しでも、すぐれた態度をとり得ているということができようか」(同上：162)と私たちに問いかける。私たちは肉体の命を延ばすことに必死で、刻一刻と削られていく生命に取りすがって生きているが、それでは秦の始皇帝と全く変わらないのではないか。

最後に「結局のところ、死の問題はどうなるのか。どうにかして解決する方法があるのか。現代人が、すべて、簡単に納得するような解決は、どこを見まわしても見当たらないようである。どうしようもないところが、問題の実情である。しかし、この問題は、どうしようもないといってすましてはられない。死は、解決の方法があろうとなかろうと、現実の事実として迫ってくる。死が迫ってくるということだけは、動かすことはできない。宿命的事実である。死の問題は、どうしても解かなければならない問題として、人間のひとりひとりに対して、くりかえしくりかえし提起される。どうしても解かなければならないけれども、どうしても解くことができない。これは、永遠のなぞとして、永久に、人間の上に残るのであろう」(岸本 1964:163)と締めくくっている。

岸本は一度目の手術を終えたあとも、ガンは再発を重ね、大小十数回の手術を繰り返したという。死の恐怖におびえながら、懸命にガンと向き合って生き抜いたが、その彼もこのどうしようもない問題である死を前にして、出した答えは一日一日を「よく生きる」ということであった。これが生の問題に対する最上の解決と同時に、死の問題に対する解決の方法でもあったのである。しかしこれでは問題の解決にはなっていないであろう。彼もまた死という大事に気付きながら、解決法が分からずどうすることもできずただ自分の悲痛な人生を受け入れざるを得なかった一人であったのである。

3. 3 死の克服こそ幸せのための大条件

ここまで二人の証言について確認してきた。両者に共通することは、人間にとって死は大問題であるということである。しかし両者もまた死の解決が出来ずに悲嘆してこの世を去っていった。死を前にすると一切の幸せは色あせてしまう。まだその人に直接死の恐怖がやってきていなくても、死に向かって生きる人生は常に不安から離れきれない人生になる。それならば人間の生きて行く先にある死を解決し、死を前にしても崩れないものがあれば、それがほんとうの幸せといえるのではないかという問いがたつ。

先ほど紹介した岸本もほんとうの幸福について次のように言及している。「人間が、ふつうに、幸福と考えているものは、傷つきやすい、みかけの幸福である場合が、多いようがあります。それが、本当に力強い幸福であるかどうかは、それを、死に直面した場合にたたせてみると、はっきりいたします。たとえば、富とか、地位とか、名誉とかいう社会的条件は、たしかに、幸福をつくり出している要素であります。また、肉体の健康とか、知

恵とか、本能とか、容貌の美しさというような個人的条件も、幸福をつくり出している要素であります。これが人間の幸福にとって、重要な要素であることは、まちがいはないのであります。だからこそ、みんなは、富や美貌にあこがれるのでありまして、それは、もっともなことでもあります。しかし、もし、そうした外側の要素だけに、たよりきった心持でいると、その幸福は、やぶれやすいのであります。そうした幸福を、自分の死と事実の前にたたせてみますと、それが、はっきり、出てまいります。今まで、輝かしくみえたものが、急に光りを失って、色あせたものになってしまいます。お金では、命は、買えない。社会的地位は、死後の問題に、答えてはくれないのであります」(同上：48)。

岸本がこの文章でいう言葉を借りれば、幸福には「傷つきやすい、みかけの幸福」と「本当に力強い幸福」の二つに分けられる。この「本当に力強い幸福」のことを本稿ではほんとうの幸福と呼んでいる。では死の大問題は人間が解決できるのだろうか。本当に死を前にしても崩れない幸せなんてあるのだろうかと疑問に思えてくる。本章ではほんとうの幸福についてまずその輪郭を示したいと述べていた。私たちは死にたくないから、少し身体に不具合があれば病院に行き治療をしてもらう。だがそうして一分一秒命を延ばしても少し伸びただけでやがて必ず死ななければならない矛盾を私たちは抱えて生きている。

死を前にすれば一切の幸せが総崩れしてしまう。どんな華やかな人生も例外ではない。パスカルはどんな人の人生も「最後の幕は血で汚される。劇の他の場面がどんなに美しくても同じだ」(パスカル 1973：147)と言っている。死がやってきたら全て崩れてしまうのなら、私たちの人生は、苦しむだけの人生になってしまうのではないか。

しかし岸本が述べたように「死は、解決の方法があろうとなかろうと、現実の事実として迫ってくる。死が迫ってくるということだけは、動かすことはできない。宿命的な事実である。死の問題は、どうしても解かなければならない問題として、人間のひとりひとりに対して、くりかえしくりかえし提起される。どうしても解かなければならない」(岸本 1964:163) 問題である。

哲学者は「死」を人生最大の問題と位置づけ、その問題の解決に人生を賭けた。次章ではそのどうにもならない死の大問題を克服し、ほんとうの幸福になるにはどうしたらよいかについてその答えを哲学の観点から見つめていき、問いに対する解答を示していく。

4. ほんとうの幸福になるには

4. 1 哲学青年藤村操の投身自殺が提起する問題

まず「死」について深く扱っている学問として考えられるのは哲学であろう。哲学では「死」を人生最大の問題としている。そこでは哲学者はどのように「死」に対して解答しているのだろうか。本節では確認したい。

明治 36 年 6 月、哲学少年藤村操が華厳の滝に投身自殺した事件は、当時の知識人やメディアの波紋を呼んだ。藤村操は当時 18 歳の東京第一高等学校、現在の東京大学で哲学を学ぶ学生であった。その彼が自殺間際、華厳の滝の岩頭に残した遺言は有名になっている。

「悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレーショの哲学竟に何等のオーソリティーを備するものぞ、萬有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懐いて煩悶、終に死を決するに至る。」(岩頭之感)

彼を自殺まで追い込んだのは「死」を前にしたら全ては崩れてしまう人生の中で日々の幸せを求めるその「不可解さ」である。この無限に広がり大宇宙(天壤)と、悠久の過去、永遠の未来を持つ歴史(古今)を前にして、たった五尺(約150cm)の小身が、「死」を人生最大の問題を前にしては、どうしようもない。必ず死ぬのなら10年生きようと20年長生きしたところで、何の価値があろうか。ホレーショの哲学は私に何ら解答を与えてくれなかったと言い遺し藤村は自殺した。この事件以前は、多くの学生が西洋からパスカルやデカルトなどの思想を学んでいたが、藤村の自殺以降には哲学を学べば子供が自殺をすると思ったか、親が子供に哲学を学ばせないようにさせたという。

では彼が学んでいた哲学には何が教えられているのか。哲学といってもソクラテス以降約二千数百年経っているため、ここでその歴史の全てを説明できるゆとりはない。そこで長い哲学の歴史から一人の哲学者を選んだ。その一人とは20世紀最大の哲学者と評されるハイデッガーである。

現代哲学の最高峰といわれるハイデッガーの哲学は、それまで当たり前であった神中心の世界観を捨て、自分の心を中心にして周りの世界の成り立ちを精緻に分析していったものである。彼は、人間を「死への存在」と規定し、不安の問題、不安から逃避している人間の在り方を、極めて厳密に明らかにする。次節ではこのハイデッガー哲学について詳述する。

4. 2 ハイデッガー哲学が示すもの

この節ではハイデッガー哲学について説明する。ハイデッガーは人間のことを「世界内存在」と規定した。「世界内存在」とは、すでにある世界の中に人間が住んでいると言う意味ではなく、「世界の内に在る、という在り方をしているものが人間だ」ということで、言い換えると、世界は人間(私)の構成分の一つということの意味する。私の身体も、目の前の机も、床も、家も、世界の全てひっくるめたものが私だ、ということである。同じものでも人によってそれまでの間にどれだけ慣れ親しんできたかにより見え方・感じ方が変わってくるのはそのためである。

ここで慣れ親しんでいるというのは、それらのものが、私にとって意味を持つ、ということである。机は、書き物をするという点で、椅子は、座るという点で、自分の行為にとって役立つものである。すべてのものは、私にとってどういう意味を持つか、という見方のもとでそれなりの意味を持っている。

この書き物をする、とか、座る、とかそういう自分のあり方を、ハイデッガーは存在可能性と呼んでいる。すべてのものの意味は、私のさまざまな存在可能性から導かれてくる

のである。私の存在可能性とは、書く、座る、以外にも、歩く、走る、移動する、などさまざまあり、それらに対応して、靴や自転車や自動車が、意味づけされてくる。

では人間最後の究極の存在可能性とは何か。それは、死ぬ、ということだとハイデッガーは言う。ハイデッガーが人間を「死への存在」と呼んだのもそのためである。私が「死」ということにより、これまで慣れ親しんで感じられた世界の一切が意味を失い、不気味な世界となり、人間は「不安」という気分にとらわれてしまう。これを分かりやすくいうと、人間は世界を慣れ親しんだものに位置づけていても、根本には「死」が存在しているために、常に不安から離れきれないということである。そのため人間存在は「死」が解決されない限り、幸せにはなれないということをハイデッガーは述べている。

そのハイデッガーが出した「死」の問題に対しての解答は、「根底に存在する死の不安につながれた世界を脱却する」、ということであった。「死へむかって開かれた自由のみが、現存在に端的な目標を与える」（ハイデッガー1994：324）と言われるのがそれである。この文にある「死へむかって開かれた自由」が、ハイデッガーの「死」の問題に対して出した答えである。「死へむかって開かれた自由」とは「ただ死に関して障害にならない自由」と言い換えられる。私たちの心の根底にある「死」の不安の解決こそがほんとうの幸福のための条件なのである。

4. 3 時代は、西洋から東洋へ

ハイデッガーはほんとうの幸福を「死に関して障害にならない自由」と結論付けた。ではこれは一体どのような世界なのであろうか。残念ながらハイデッガーはこの問いについて答えようとしたが、彼の著書『存在と時間』は、完成を前に、彼が亡くなったため、その答えを彼に尋ねようがない。

一方で波動方程式やシュレーディンガーの猫などを提唱し、今日の量子力学の発展に尽くしたといわれるシュレーディンガーは、彼の著書『精神と物質』の中に「西洋科学は東洋思想の輸血を必要としている」と書いているが、現代は、様々な分野で世界が西洋から東洋に移り変わっている時代だと言われている。2020年五輪の開催国に東京は選ばれたが、その時のプレゼンテーションのある言葉が話題になり、2013年の流行語年間大賞にもなった。その言葉とは「おもてなし」であるが、「おもてなし」は日本人の心を良く表している言葉として世界中から大きな反響があった。その「おもてなし」の精神の根底にあるのは仏教だと言われる。今日仏教と聞くと年取ってから聞くもの、あるいは葬式仏教、法事仏教と揶揄されていて、そんな深い教えがあるとは思われていないのが、現実である。

しかし文豪芥川龍之介は著書『侏儒の言葉』で「我々の生活に欠くべからざる思想は或は「いろは」短歌に尽きているかも知れない」（芥川 2003：105）と書き、『いろは歌』には私たちの生活に欠かすことのできない思想があるのではないかと語っている。ではその『いろは歌』には何が教えられているのだろうか。以下にその原文を載せた。

「いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ
うゑのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす」

「色は匂えど 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならん
有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔いもせず」

色とは桜のことで、色が匂うとは、桜の花が満開に咲き誇っているということであるが、その桜の花もやがては散ってしまう。我が世誰ぞ常ならんとは、私の世を誰がいつまでも続くと言ったのだろうかということである。平家物語は平家の興隆から衰退までを描いた物語であるが、「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる一時代を築いた平清盛もやがて病により死んでいる。

彼ほど成功した人はいないといわれる豊臣秀吉は、日本を統一し、大阪城をたて、この世の栄耀栄華を極めた。しかしその秀吉も、臨終には「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことも 夢のまた夢」と言い遺し死んでいる。どんな華やかな人生を送っても最期は儚い夢と散ってしまうのである。有為の奥山とはこのように死んでいく時には信じているもの全てに裏切られ苦しみで終わる人生のことをいう。私たちの人生は途中、たくさんの楽しみを経験するが、それも一瞬で人生はあつという間に過ぎ去ってしまうのである。

しかし「いろは歌」はこれで終わりではない。その後には、その有為の奥山を今日越えたのだと言われている。そんなことを言うと、お前は浅い夢をみているのだよ、酔っているのじゃないかと言われるかもしれないが、浅い夢を見ているわけでも酔っているわけでもないよと歌われている。この世界のことを芥川が、私たちの生活に欠かすことのできない思想と言っているか分からないが、いろは歌には以上のような意味が込められている。

日本思想史上最も多くの人に影響を与えた古典といえば『歎異抄』であるが、その『歎異抄』には「摂取不捨の利益」や「無碍の一道」という言葉が教えられている。「摂取不捨の利益」とは、利益とは幸福のこと、摂取とは摂め取る、不捨はすてられないということだから、摂取不捨の利益とはガチッと摂め取られて捨てられない幸せのことを意味する。また「無碍の一道」とは、一道とは世界のこと、無碍とはさわりにならないということで、つまりどんな障害や災難、たとえ死であっても崩れない世界が「無碍の一道」いうことである。この世界こそハイデッガーが言った「死に関して障害にならない自由」のことではないか。

『いろは歌』でも『歎異抄』も共に仏教の思想に由来するものであり、この深い思想に気付いたためか、東日本大震災以降、鴨長明の『方丈記』を読む人が増えたという。日本人は近代以降西洋の文化を学ぼうと、積極的に他文化を取り入れていったが、そういえば日本の三哲と言われる西田幾多郎、田辺元、三木清は、最初西洋哲学を学んでいたが、晩年は日本の古典を自身の哲学の礎としている。今日の日本には日本古来より伝わる思想を学ぶ必要があるのかもしれない。

本稿の最後に現代においてほんとうの幸福を問う意義について述べておこうと思う。「死」の問題を現代では問う必要はないという声も聞こえてくるし、またどうにもならないものが「死」だからこそ、そんなこと考えないで、目の前の幸せを求めた方がいいのだと言われると、この意見に頷く人は多いように感じる。しかし本稿でも重ねて言ってきたが、それは間違いである。目の前の幸せを求めてはならないとは言っているのではなく、自分の確実な将来を見据えよということである。思えばあるかないか分からない老後のことや、めったに起こらないのに火災保険で有事に備えておくなどと、自分の将来については

真剣に考えているのに、どうして自身の確実な未来を考えないのであろうか。別に現代になったから人は死ななくなったのではない。医療が命を劇的に延ばしただけで、死ぬという事実には何ら変わりはない。いつの時代でもどんな場所でも常に投げかけられた問題であり、私たちの一人ひとりがこの問題に対して答えなければならない。その解答の輪郭なりを本稿では示してきた。

「人間は、死が、いつ来るかわからないということを忘れて、その日その日を暮らしている。やがて死すべきものが、いつまでも死なないような気持で、生きているのである。その点では、厳密に言えば、人間の日常生活は、一つのごまかしの上に営まれている。これは、すこしも悪意のないごまかしである。しかし、もっとも深刻なごまかしであるというよりほかはない」(岸本 1964 : 153) と岸本は言うが、ますます忙しくなる現代、激しい変化に私たちは翻弄されている。今ここで一度立ち止まって、自分にとって本当に大事なことは何であるか考え直す必要があるのではないか。

さらに「人は、薄氷の上をわたりながら、自分の踏んでいる氷が、そのように薄いものであると感じないだけである。いつ崩れはじめるかわからない安心感の上にあぐらをかいて、たよりにならないものをたよりにして、生きている」(同上 : 157) のが、全ての人の実態であるとも言う。この全ての人が抱える死からの不安を取り除くことによって、真の意味で幸福な人生を送ることができるのである。

おわりに

井上俊 (1973) は「生の全体から死が完全に欠落してしまうと、生そのものが平板化し、貧困化するという問題も生じてくる」と述べ、また『生の全体から死を除外すること (フロイト)』とひきかえに、人は『生きがい』までも失ってしまうことがある。逆に言えば、死が導入されることによって生がその輝きを取り戻すことがある」(井上 1973:18) と述べている。現代人はあまりにも「死」が人生から抜け落ちていて、死と聞けば、死なんて考えても仕方ないと言うもの、死んだら死んだ時さと嘯くもの、兎角に現代人は死を考えようとしなない。ないかもしれない将来のことは考えるのにどうして 100% 確実な将来を深く考えないのであろうか。古市ならそんな死なんて考えてもどうにもならないんだから、現実を深く考えずに、「今、ここに」ある幸せを求めよう、それが現代ではないかと言うかもしれない。本稿は古市だけでなく、多くの人を持っているそうした考えに異を唱えるために書いた。

しかし本稿の結論としては仏教を挙げたのだが、本来であれば、死が障害にならなくなった世界と、どうすればその世界に行けるのかについて、仏教では教えられていることを説明しなければならないのだが、本稿ではほんとうの幸せと世間一般で言われる幸せの違いと、その条件とは何かということに力点を置いたため、そこまで述べるゆとりはなかった。また難しい言葉や論理の飛躍など読みにくいところがあったかと思うが、ひとえに筆者の力不足の故である。ご了承願いたい。日本は仏教国とはいいますが実際は、仏教にどのような教えが教えられているか知る人は少ない。本稿を縁として、一人でも知る人がいれば

幸いである。

最後にでは仏教では教えられる「摂取不捨の利益」とは「無碍の一道」とはどういうことなのか。そのことについて詳細に示すことを残された課題として挙げ、本稿を終えよう。

参考・引用文献

- パスカル著, 前田 陽一, 由木 康訳, 1973, 『パンセ』 中央公論社
得能文訳注, 1936, 『仏説四十二章経・仏遺教経』 岩波書店
岸本英夫, 1964, 『死を見つめる心—ガンとたたかった 10 年間』 講談社
井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』 筑摩書房
E. シュレーディンガー著, 中村量空訳, 1987, 『精神と物質—意識と科学的世界像をめぐる考察』 工作舎
鶴見済, 1993, 『完全自殺マニュアル』 太田出版
諸富祥彦, 1997, 『むなしさの心理学』 講談社
頼藤和寛, 2001, 『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』 文藝春秋
芥川龍之介, 2003, 『侏儒の言葉・文芸的な、余りに文芸的な』 岩波書店
中西新太郎, 2004, 『若者たちに何が起こっているのか』 共栄書房
メアリー・C・ブリントン著, 池村千秋訳, 2008, 『失われた場を探して—ロストジェネレーションの社会学』 NTT 出版
山田昌弘, 2009, 『なぜ若者は保守化するのか—反転する現実と願望—』 東洋経済新報社
豊泉周治, 2010, 『若者のための社会学 希望の足場をかける』 星雲社
有元裕美子, 2011, 『スピリチュアル市場の研究』 東洋経済新報社
古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社
マルティン・ハイデッガー著, 細谷貞雄訳, 2011(1994), 『存在と時間下巻』 ちくま学芸文庫
島田裕巳, 2012, 『人は死ぬから幸福になれる』 青志社
曾和信一, 2012, 『『教育と福祉』の希望についての一考察』 四條畷学園短期大学 45 (6-23)
古市憲寿, 2012, 『僕たちの前途』 講談社
三谷尚澄, 2013, 『若者のための〈死〉の倫理学』 ナカニシヤ出版
横田千里, 江口悟, 諸麦美紀, 「(変わる働き方 選択のとき: 13) 「勤勉」どこへ 若者、描けぬ「職業人生」, 『朝日新聞』, 2009. 7. 12, 朝刊, 3 頁
厚生労働省医政局指導課, 2011, 「平成 24 年度在宅医療連携拠点事業『在宅医療の最近の動向』」 http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/zaitaku/dl/h24_0711_01.pdf (2012 年 12 月 10 日閲覧)
東京都健康長寿医療センター研究所, 2013, 「入浴中に急死する高齢者数—冬場は夏場の 11

倍！ 主な原因は脱衣室・浴室等の温度低下による「ヒートショック」 冬場の住居内の温度管理と健康について」 http://www.tmghig.jp/J_TMIG/release/pdf/press_20131202.pdf
(平成 25 年 12 月 11 日閲覧)

佐藤裕一／回答する記者団, Business Journal, 2013. 12. 13「鉄道的人身事故、関東で増加、年間 600 件で毎日 1 人以上が自殺～自殺者特定の恐れも」
http://biz-journal.jp/2013/12/post_3598.html (平成 25 年 12 月 19 日閲覧)